

## 釋迦牟尼如來像法滅盡之記解説

(圖版第九圖 参照)

西藏の聖典<sup>タンジュール</sup>丹珠爾の中に于闐國懸記の一篇が存して、早くより歐米東洋學者の注意を惹いて居つたことは周知の事實である。昨年其の邦語譯が我が寺本師によつて此の于闐國史中に收めて公刊せられたのは、學界の慶事である。先年佛のペリオ教授が敦煌の石室から獲た多くの遺書の中、卷首に「釋迦牟尼如來像法滅盡之記」と題し、卷末には「釋迦牟尼如來像法滅盡因緣一卷」と識した短篇があつて、今は巴里の *Bibliothèque Nationale* の所藏に歸して居る。教授は此の一卷が西藏語の于闐國懸記の漢譯本であることを看破して、一九一四年に之に關する報導を成し (*Journal Asiatique. Série XI. Tome IV. No. 1, p. 144*)。また一九二〇年六月巴里の亞細亞協會に於る講演にも之を披露した。 (*Ibid. Série XI, Tome XVI. No. 2. p. 354*) 茲に掲げたのは其の卷首に當る一部分であつて題記の下、「國」字の上の文字は分らないが、|| 或は此の寫本には初めから文字は書かれて無かつたかと思はれるが|| 大蕃即ち西藏を意味する二字の存した事、若くは存すべきは疑無き所で、大蕃國大德三藏法師沙門法成譯と讀まらるべきである。

法成といふ人については、またペリオ教授の考が一九一四年に發表されて居る (*J. A. 1914. Série XI Tome IV. No. 1. p. 142-143*) 自分の巴里で見た薩婆多宗五事論卷一にも甘州修多寺法成譯と見えて居るが、教授の言ふ